

夏目先生の
「人」及び「芸術」

和辻哲郎

夏目先生の「人」
及び「芸術」(抄)

〔前略〕

先生を高等学校の廊下で毎日のように見た頃は、ただ峻厳な近寄り難い感じがした。友人たちと夕方の散歩によく先生の千駄木の家を見に行つたが、中へははいつて行く勇氣はどうしても出なかつた。併し先生に紹介された時の印象はまるで反対であつた。先生は優しくて人を吸いつける様であつた。そうしてこの印象は最後まで続いた。私は如何いかに峻厳な先生の表情に接する時にも、先生の温情を感じないではいられなかつた。

私が先生を近寄り難く感じた心理は今でも無理とは思わない。私は現在同じ心理を、自分の敬愛する××先生に対して経験している。それは恐らく自分の怯懦から出るのである。併しこの怯懦は相手があたか恰も良心の如く自分に働きかけて来るから起るのである。その前に出た時自分の弱点と卑しさを恥はじまないでいられない故に起るのである。私は夏目先生が気難かしい癩癩持であることを知っていた。もとよりそれは単なる「我儘」わがままではない。総すべて自己の道義的気質に抵触するものに対する本能的な気短い怒である。従って、自己の確かでない感傷的

な青年であつた私は、自分が道義的にフラフラしている故を以て無意識に先生を恐れた。そうして先生の方へ積極的に進んで行く代りに、先生の冷さを感じていた。こう云う感じを抱いた者は恐らく私一人ではなかつたらうと思う。

この事実を先生の方から見ればどうであるか。私はそれを明かにするために先生の手紙の一節を引く。――

……私は進んで人になついたり又人をなつてたりする性しょうの人間ではないようです。若い時はそんな挙動も敢てしたかも知れませんが、今は殆んどありません。好き

な人があってもこちらから求めて出るような事は全くありません。……然し今の私だって冷淡な人間ではありません。……

「私が高等学校にいた時分は世間全体が癩に障ってたりませんでした。その為にからだを滅茶苦茶に破壊してしまいました。だからも好かれて貰いたく思いませんでした。私は高等学校で教えている間ただの一時間も学生から敬愛を受けて然るべき教師の態度を有^もっていたという自覚はありませんでした。……けれども冷淡な人間では決してなかったのです。冷淡な人間ならああ肝癩

は起しません。

「私は今道に入ろうと心掛けています。たとい漠然たる言葉にせよ、道に入ろうと心掛けるものは冷淡ではありません。冷淡で道に入れるものではありません。」

それは先生の前に怯懦を去った時直ちに解ったことであつた。先生は寧ろ情熱と感情の過冗かじように苦しむ人である。相手の心の動きを感じ過ぎるために苦しむ人である。愛に於て絶対の融合を欲しながら、それを不可能にする種々な心の影に対してあまりに眼の届き過ぎる人である。そのため先生の平生にはなるべく感動を超越しよう

とする努力があつた。先生は相手の心の純不純をかなり鋭く直覚する。そうして相手の心を細かい隅々に亘つて感得する。先生の心臓は活潑にそれに反応するが、併し先生はそれだけを露骨に発表することを好まなかつた。先生は親切を蔭でする、そうして顔を合わせた時にその親切に就て言及されることを欲しない。先生にとっては、最も重大なことはただ黙々の内に、瞳と瞳との一瞬の交叉の内に、通ぜらるべきであつた。従つて先生は対話の場合かなり無遠慮に露骨に突込んで来るに關わらず、問題が自分なり相手なりの深味に触れて来ると、直ぐに言

葉を転じて了う。そうして手触りのいい諧謔を以て柔かくその問題を包む。(勿論心の問題でもそれが個人的関係に即してではなく一つの人生観思想問題としてならば、先生は底までも突込んで行くことを辞しなかつた。) これらの所に先生の温情と厭世観との結合した現われがあつたようである。

右のような先生の傾向のために、諧謔は先生の感情表現の方法として欠くべからざるものであつた。先生の諧謔には常に意味深いものが隠されている。熱情、愛、痛苦、憤怒など先生の露骨に現わすことを好まないものが。

そうして人々は談笑の間に黙々としてこの中心の重大な意味を受取るのである。先生がその愛する者に対する愛の発表は主にこれであつた。（私の考^{かんがえ}ではこれが「諧謔」の真の意味である。従つて諧謔は「痛苦」から「悩み過ぎる人」から、「厭世的な心持」から産れるのである。そうでないものは浮薄と卑賤の徴候である。）〔中略〕

先生の厭世的な気分は恋愛を取扱う態度に充分現われている。しかしそれが更に明らかに現われているのは生死の問題に就てである。ここに先生自身の超脱への道が

あつたように思う。

元来先生は軽々しく解決や徹底や統一を説く者に対して反感を持っていた。人生の事はそう容易に片附くものでない。頭では片づくだろうが、事實は片附かない。

——しかしこれは片附ける事自身に対する反感ではなくて、人生の矛盾や撞着をあまりに手輕に考える事に対する反感である。先生は望ましくない種々の事實のどうにも出来ない根強さを見た。そうしてそのため^{もが}に苦しみ躓いた後、厭世的なあきらめに達した。顧みて口先ばかり景色のいい徹底家の言葉をきくと、思わずその内容の空

虚を感じないではいられないのである。

けれどももあきらめに達した故を以て先生は人生の矛盾不調和から眼をそむけたわけではなかった。先生はますます執拗にその矛盾不調和を凝視しなければならなかった。寂しく悲しく苦しかったに相違ない。（たとえば種々の点で所謂徹底家よりもあきらめに沈んだ先生の方が遙かに徹底していたとは云え。）

それ故先生は「生」を謳歌しなかった。生きていく事は致方いたしかたのない事実である。望ましいことでも望ましくない事でもない。ただ併し生きていく以上はしなければ

ならない事がある、則のつとらなければならぬ法則がある。

それは苦しいかも知れない、苦しくても止むを得ない。

——抑そもそも生きる事が苦しむ事なのである。生きている

以上は種々の日常の不快事を（他人の不正や自分自身の不完全や好ましくない運命やを）避ける事が出来ぬ。寧むしろそれらの不快事が生きている事の証拠である。人生とはもともとかくの如きものに他ならなかつた。

併し先生は「死」をも謳歌しなかつた。死も亦致いたしかた方かたのない事実である。「死」は「生」よりも好くはない。

また「生」より悪あしくもない。従つて死んでもいいし死

ななくてもいい。生きていてもいいし、生きていなくてもいい。

このような生死に対する無頓着が先生のはいつて行くうとした世界であった。先生はそこに到着するまでの種々の心持を製作の内に現わしている。「門」「彼岸過迄」「行人」「心」などはその著しいものである。ここにも開展のあととは認められる。「心」に於て極度までも押しつめられた生死の問題は、右の無頓着が著しくなるにつれて、もう再び取り上げられる機会がなかった。

併し人生觀の如何いかんに関わらず、先生の内の「作家」は先生を駆使して常人以上に「生かせ」働かせた。殊に生死に対する無頓着は反かえつてこの作家を強健ならしめたように見える。「明暗」を書いていた先生は或時こう云った。「毎日すべったのころんだのとクダラない事を書いているのは、實際やり切れないね。」實際こう感じる事もあつたに相違ないだろう。而しかも先生は渾身の力を注いで製作しないではいられなかつた。そうして芸術的勞力その者が先生の心を満足させた。「明暗」の執筆中の如きは、製作の活動それ自身を非常に愉快に感じてい

たようである。そのため生理的にも今迄になく快適を感じていたらしかった。（その実は製作の興奮のため徐々に身体を疲労させたのであったらうけれど。）

先生が製作によって生の煩わしさを超脱する心持は、私の記憶では、「草枕」や「道草」などに描かれていたと思う。「後略」

（『新小説』臨時号、大正六年一月）

日本文学電子図書館

夏目先生の「人」
及び「芸術」(抄)

著 者：和辻哲郎

制作者：宮澤一郎

底 本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行

日本文学電子図書館